

## トピック — 家計調査報告にみる最近の野菜消費の動向 —

先月公表の家計調査報告（年計値、総務省）をもとに、野菜の1人当たり家計購入数量の動向を見ると、平成22年以降は微増傾向であり、平成26年は前年比1%増の5.3kgとなっている。

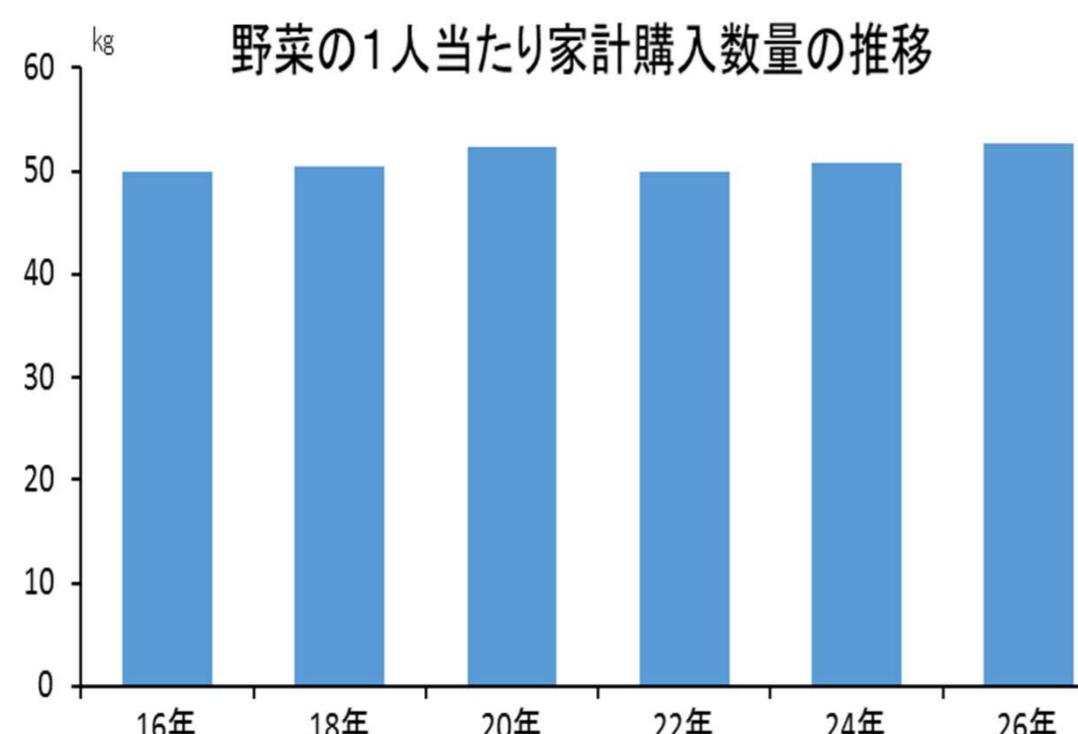
調査対象の品目別（20種類）の家計購入数量を平成16年と26年で比較すると、キャベツ、はくさい、レタス、ブロッコリー及びれんこんの5品目が2割以上増加する一方、さといもが3割以上減少している。

増加率が最も高かったブロッコリー（35%増）の国内全体の仕向量（国内出荷量+生鮮輸入量+冷凍輸入量）をみると、平成25年は193千トンとなり15年対比で9.7%の増加であるが、輸入量の割合は48%から37%へと低下している。さらに輸入量は17%減少している。

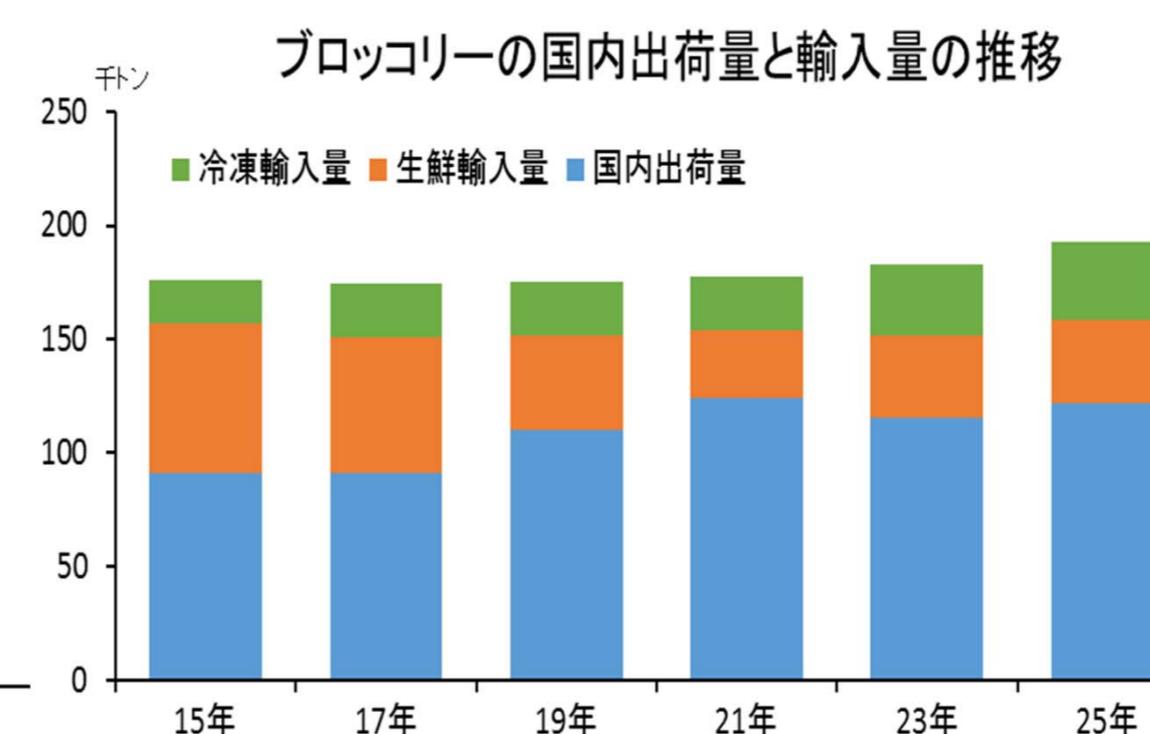
ブロッコリーは、かつては夏場を中心に米国等から多く輸入されていたが、最近では、夏場にも国内主産地の形成が進んでおり、特に主力産地の北海道、長野県の出荷量（平成25年）は対15年比でそれぞれ155%、73%と大幅に増加している。

また、増加率が2割以上であったキャベツ（22%増）、レタス（24%増）の国内作付面積を見ると、平成20年までは農家の高齢化や後継者不足等もあって減少傾向であったが、21年以降は微増傾向となり、キャベツは15年とほぼ同程度の水準までに回復している。キャベツやレタスは、サラダにもよく使用されるが、平成26年の家計のサラダの年間購入金額は、二人以上世帯、単身世帯ともに前年比でそれぞれ6%増（1,270円/人）、9%増（2,038円/人）と引き続き需要が堅調である。

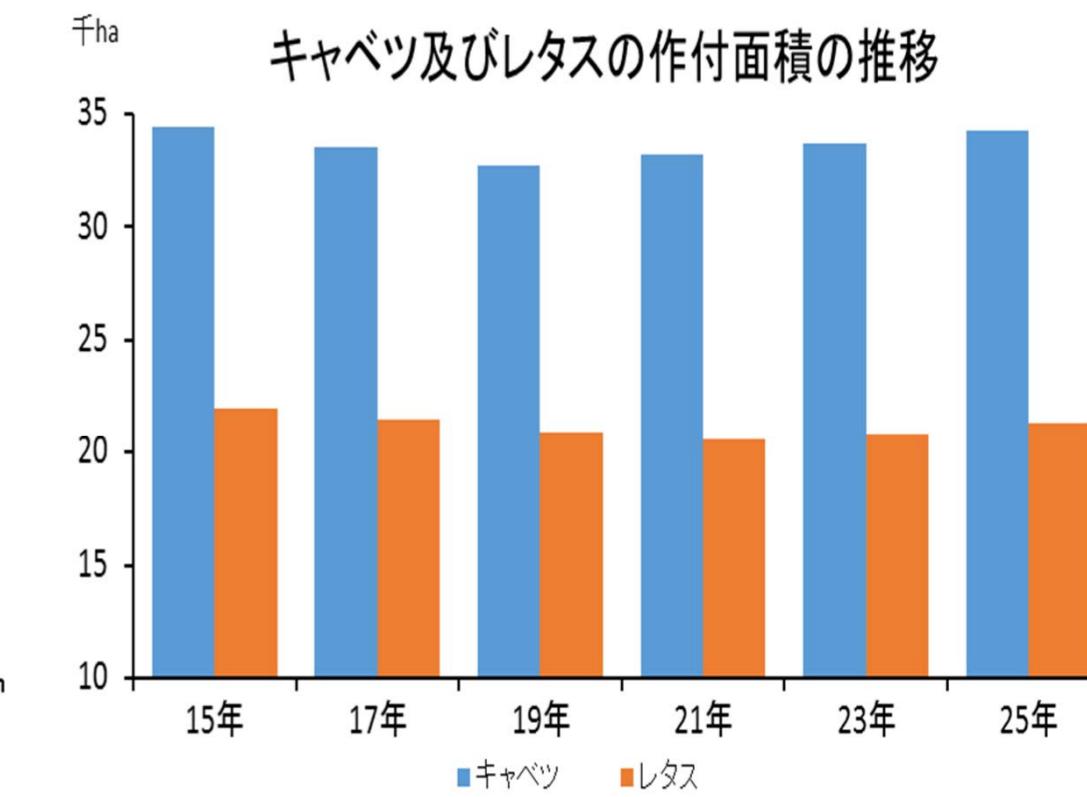
ブロッコリーの国産シャアの回復やキャベツ作付面積の回復の動きに加えて、最近では、外食・中食等事業者が、品質差別化等の観点から輸入野菜を国産野菜に切り替える動きもみられており、需要が堅調な野菜の国内の主産地形成の取組強化が改めて求められている。



資料:ベジ探、原資料:総務省「家計調査報告」



資料:ベジ探、原資料:農林水産省「野菜生産出荷統計」、財務省「貿易統計」



資料:ベジ探、原資料:農林水産省「野菜生産出荷統計」

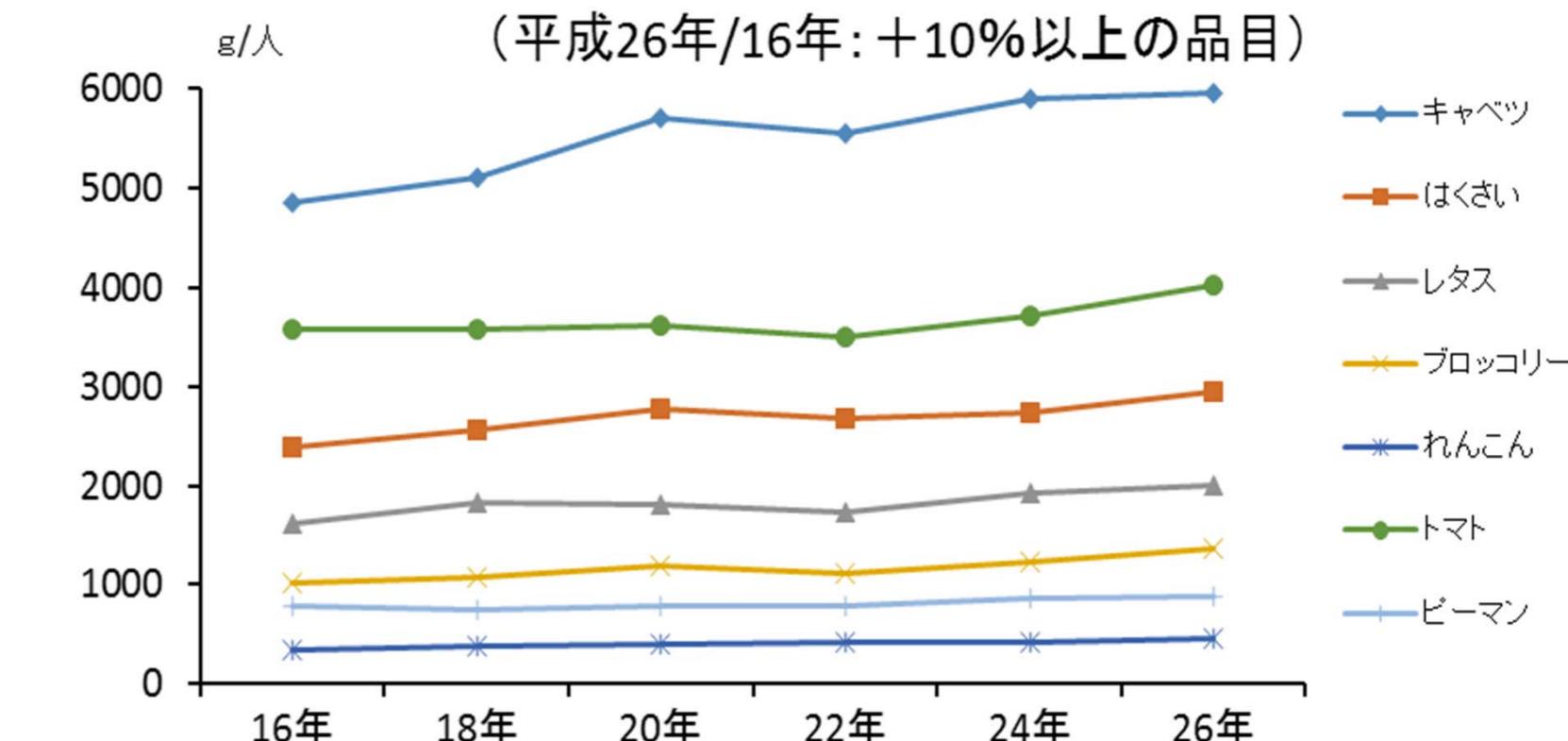
1人当たり家計購入数量の品目別増減率等  
(平成26年/16年)

+20%以上	ブロッコリー	れんこん	レタス	はくさい	キャベツ
	34.8 (1,364g)	33.3 (460g)	24.6 (2,001g)	23.2 (2,944g)	22.4 (5,951g)
+10~20%未満	トマト	ピーマン			
	12.3 (4,022g)	11.9 (885g)			
0~+10%未満	たまねぎ	にんじん	だいこん		
	8.9 (5,033g)	8.8 (2,930g)	0.3 (4,644g)		
△10~0%未満	かぼちゃ	ぱれいしょ	ねぎ	ほうれんそう	かんしょ
	△0.1 (1,423g)	△0.5 (3,548g)	△0.6 (1,616g)	△2.8 (1,129g)	△8.0 (960g)
△20~△10%未満	きゅうり	なす	ごぼう	さやまめ	
	△10.7 (2,532g)	△12.3 (1,423g)	△14.9 (607g)	△17.7 (750g)	
△20%以上	さといも				
	△32.2 (623g)				

資料:ベジ探、原資料:総務省「家計調査報告」

注:上段:増減率、下段:26年購入数量

家計購入数量の増加品目の年次推移  
(平成26年/16年: +10%以上の品目)



資料:ベジ探、原資料:総務省「家計調査報告」

●問い合わせ先 独立行政法人農畜産業振興機構 野菜需給部 需給業務課 前川、河原、斎藤、海老沼 TEL03-3583-9483、FAX03-3583-9484 ご意見、ご要望をお寄せください。

◆「野菜の需給・価格動向レポート」は月2回公表しています。公表時にメルマガでお知らせしますので、ご希望の方はベジ探のトップ画面、メルマガ配信登録・解除ボタンから登録してください。

★この「野菜の需給・価格動向レポート」は、[http://vegetan.alic.go.jp/vegetable\\_report.html](http://vegetan.alic.go.jp/vegetable_report.html)に掲載しています。